

ニュージーランドの人びとは、自国を熱帯太平洋に属しているというよりは、独立した存在と考える傾向が強い。ちょうど、日本人がアジアの一員であるというよりは、日本の独自性を意識することが多いのと似ている。

帆の都市のミュージアム

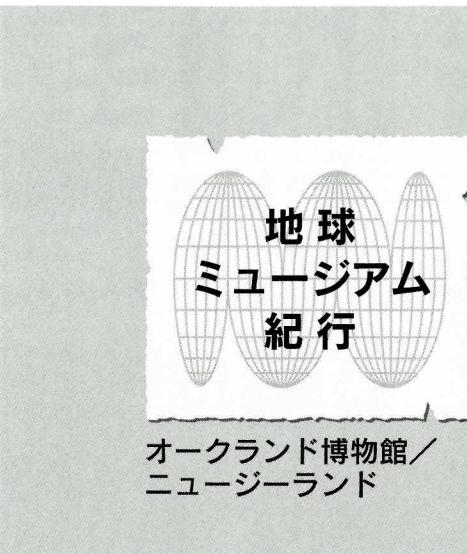
ピーター・J・マシウス

本館研究戦略センター

ところが、わたしの故郷であるオークランドに関する限りでは、少し事情が異なる。熱帯太平洋諸国からの移民をニュージーランドの他のどの都市よりも数多く受け入れ、大きな港をもつオークランドの市民は、周囲の海を愛し船遊びが生活の一部となっているためか、他のニュージーランド人よりも、太平洋地域との一体性を強く感じているようだ。オークランド市のスローガン「City of Sails(帆の都市)」は、こうした市民の気分を代弁している。人びとが「オークランドはポリネシア最大の都市だ」と自慢げに語るとき、フィジー、トンガ、サモア、クック諸島、ニウエーをはじめ多くの太平洋諸島民の移住先がオークランドなのだ、という少なからぬプライドが垣間見える。むつとも実際のところ

最近、わたしは、オークランド博物館の企画をもとにした民博特別展「オセアニア大航海展」の準備のために、何度も同博物館を訪れる機会があつた。オークランド博物館の企画した国際巡回展「ヴァアカ モアナ」は、オーストロネシア語を話す人びとが果たした初期の大航海の歴史と方法を物語るものである。事実、彼らの一部は、数百年前に、タマキ(オークランド地峡のマオリ語読み)近辺に到達しているので、人間が住み始めた当初から、オークランドの歴史は帆に強く結び付いているわけだ。

二〇〇七年四月初め、四ヶ月にわたった「ヴァアカ モアナ」展の閉幕式が終わって博物館を出たわたしは、ヨーロッパ人の子孫である陽気なニュージーランド人タクシー運転手に出会つた。まつたくの偶然



オークランド博物館/
ニュージーランド

なのだがそのタクシー会社の名前は「Sail Taxis」であった。もちろん、「ヴァアカ モアナ」展とは何の関係もないけれど、その社長はオークランドに移住したインド系フィジー人だし、運転手自身も、パプアニューギニアの島々を回る小さな貨物船の船長だったと言つ。

オークランド博物館は、市と太平洋の歴史にまつわる数々のテーマを展示しているが、博物館を一歩出てみると、この通り、身の回りに実際に生きている歴史を見つけることができるのだ。(和訳:久保正敏)



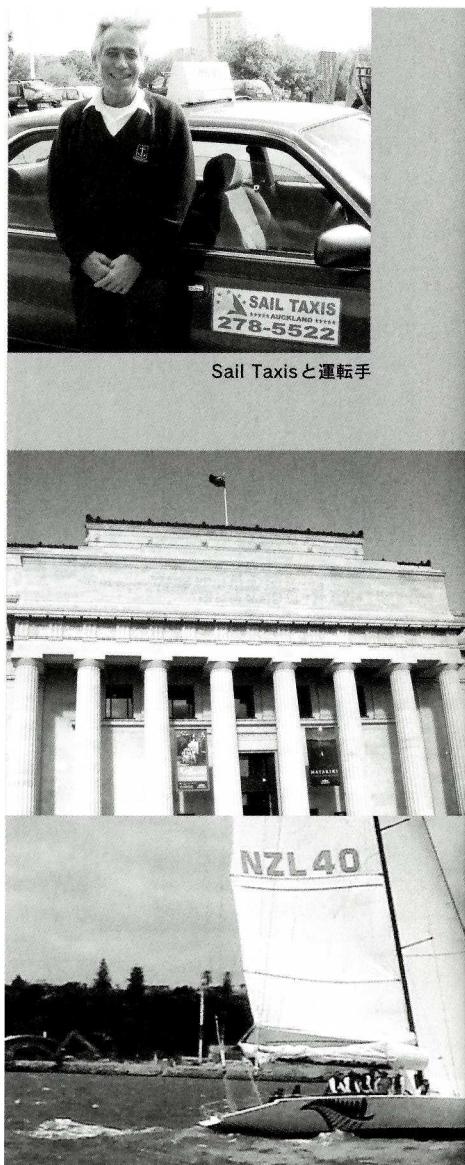
Sail Taxisと運転手



「ヴァアカ モアナ」で展示されたスポーツ・カヌー

オークランド博物館
外観

アメリカズカップにも出場したヨットと
オークランド博物館(矢印の建物)



この、近年のディアスボラ(故郷を離れて暮らす人々)は、ニュージーランドのみならずオーストラリアや北米までを含む太平洋を広く移動しており、オークランドだけが唯一の移住先ではないのだが。

月刊 ポートレート 9月号 2007 10